

のみ陽性またはすべて陰性でその診断に有用ではなかった。8 例は手術で腫瘍が発見されなかった。全体の手術による治癒率は 95.6% であった。

14. Crow-Fukase 症候群の 5 例

丸岡 伸 山崎 哲郎 間島 一浩
坂本 澄彦 (東北大・放)

Crow-Fukase 症候群は多彩な症状を呈するが、なかでも polyneuropathy, organomegaly, endocrinopathy, M protein, skin change が高率であることから POEMS 症候群とも呼ばれている。稀な疾患であるが欧米に比しわが国に多く、多発性骨髄腫に比して若年に発症し男性に多い。当科で経験した 5 例の内訳は男性 4 例女性 1 例、年齢 33-60 歳、平均 43 歳で、主な症状としては末梢神経障害・下腿浮腫・色素沈着・多毛が 5 例全例に、肝脾腫が 4 例に、M 蛋白・骨髄腫・胸腹水・髄液蛋白増加・うっ血乳頭・耐糖能障害・疣状血管腫・微熱がそれぞれ 3 例に認められた。骨髄腫を合併した 3 例のうち硬化型が 1 例混合型が 2 例で、いずれも骨シンチで陽性像として検出された。本疾患においては硬化型の骨髄腫を伴うことが多く、骨病変の検索に骨シンチが有用である。

15. 腰椎分離症における $^{99m}\text{Tc-MDP}$ SPECT の意義

渡辺 磨 橋本 学 小林 満
佐藤 公彦 戸村 則昭 渡会 二郎
(秋田大・放)

腰椎分離症について、 $^{99m}\text{Tc-MDP}$ SPECT 像と単純 X 線像、CT 像との比較を行い、その意義を検討した。臨床的に分離症と診断された 18 病巣のうち、SPECT で uptake(+) は 13 病巣で、uptake(-) は 5 病巣であった。SPECT で uptake(+) の 13 病巣のうち、11 病巣はいずれも CT で分離間隙の狭い、比較的早期の病巣であった。2 例は SPECT で uptake(+) にもかかわらず CT で分離間隙が不明瞭であったが、そのうちの 1 例は 1 年後に両側分離へと進行しており、SPECT 撮像の時期はさきわめて早期の段階であったと考えられた。SPECT で uptake(-) の 5 病巣は、CT でいずれも分離間隙が広く、陳旧性の病巣と考えられた。 $^{99m}\text{Tc-MDP}$ SPECT は腰椎分離症の検出に優れ、早期の治療に貢献し得る可能性が考えられた。

16. 肝切除前後における $^{99m}\text{Tc-GSA}$ シンチグラフィでの肝予備能評価

望月 孝史 加藤千恵次 志賀 哲
鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古舘 正從
(北大・核)

肝切除術前後に $^{99m}\text{Tc-GSA}$ シンチグラフィを施行した 18 例をびまん性肝疾患の有無で 2 群に分け、肝予備能を反映するパラメータの検討を HH15, LHL15, 肝予備能インデックス (HPFI), 肝集積初速度 (D0) で行った。びまん性肝疾患合併群では術前後の HH15, HPFI, D0 に有意差を認めたが、びまん性肝疾患非合併群では有意差を認めなかった。LHL15 は、びまん性肝疾患の有無にかかわらず有意差は認めなかった。びまん性肝疾患合併例の肝切除術後では、肝予備能を反映するパラメータは HH15 である可能性が示唆された。

17. サルコイドーシスにおける ^{67}Ga scan の検討

志賀 哲 望月 孝史 加藤千恵次
鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古舘 正從
(北大・核)

panda sign と λ sign は sarcoidosis 患者の Ga スキャンにおいて特徴的なサインと言われるが、panda sign の出現頻度は人種により違うとの報告もあり、また、胸部以外の病変への Ga 分布の頻度に関する報告は、少ない。われわれは panda sign および λ sign の出現頻度および胸部以外の病変への Ga 分布を調べた。対象は、sarcoidosis 群 29 名、31 スキャン、対照群 94 名、101 スキャン。サルコイドーシスにおける λ サインの sensitivity, specificity は、それぞれ 52%, 100%。panda sign を認めた症例はなかった。眼病変、皮膚サルコイドおよび心サルコイドにおける病変への Ga 集積の陽性率は 6%, 18%, 0% と低かった。